

第三章 デリダのルソー読解の山場 訳者をして「驚くべき緻密さで遂行されているルソー読解」、「綿密かつ細心に読解を行っていくデリダの手法は見事という他はない。」と言わしめる。その手法の概要について訳者がわかりやすく説明している箇所

ルソーの読解に際してのデリダの手法は、ルソーのテキストにおける「暗黙的含蓄」と「名称的現前」と「主題的提示」とのあいだに差異を測定するということである。あるいはまたルソーがはっきりと「名言」していることと、みずからは意識することなく「記述」していることとのあいだの差異を見定めることだと言ってもよい。

批判的読解は、一、注釈という反復形式はとらない。二、テキストをあくまでテキストとして読み、テキスト外には赴かない、三、それゆえ内的なものにとどまるが、しかもなお或種の「意味する構造」を産出する、などがその中心的眼目である。

訳者はこうした読解が可能な理由として、ルソーという素材の特殊性をあげる(論文の他に「告白」のような長編の自伝を残していること)。ぼくにはそれに付け加えて彼らの呼ぶ「西洋的」なものという土台がさらにその基盤にあるように読める。

たとえば、「こういう模倣による美德は、すべて猿真似の美德であり、いかなる善い行為もそれを善いこととして行ったときにはじめて道徳的に善いのであって…[125]」と言う箇所。どう言うことはないけれど(デリダもルソーもこのこと自体に特別な注意も関心も払っていないように見えるけれど)、西洋的な性格がよく現れているように読める。もちろん、中国や日本でも道徳や倫理について論じている書物はルソーと同時代までも多数あるけれど、自然信仰も含めた宗教的な世界観を中心にするのではなく、純粹性や正確性を問題にしている点での違いとでも言えようか。(それらもまたキリスト教という世界観と密に結びついているから、複雑さをどのように扱うかという宗教観の違いとも言えるのかもしれないけれど)

その極点は第三章を丸々使って語り、その終わりになってルソーが自覚的な「名言」と無自覚な「記述」を駆使しながらなんとか描こうとしたもの、自然的な状態からそうではない状態へと移行するか否かの「ほとんど」の状態、タブーが発生したまその瞬間に社会についての箇所。

それゆえ。この社会に誕生は一つの経過ではなく、まさしく一つの点、一つの純粹で虚構的かつ不安定で把握し難い限界である。

緻密さや純粹さが線を重ねていくのは、ありもしないものの輪郭だということ。「けれどそれはどう考えても確かにある」と思わせられてしまうところに、そし書いている人がが確信しているところに、西洋的なおもしろさがある。デリダはその面白さを取り出したい。

すこし僕自身に引きつけてみれば、p204の子どもの言葉のやりとりや、子どもの言葉の習得について。自分の息子のことも重ねて読めば、1歳から2歳ごろまでの幼児が発するのは指示機能を全く持っていない、あるいは持っていたとしてもごくわずかな言語だということ。けれど、「アクセント」や身振りや表情によって、指示機能を持つ以前の自己表出性を豊かに持っていることは分かる。大人はそういう音を聞いて、自分なりの指示性をからめて受け取り、必要であれば具体的な行動をとる。